

浮游



清水研究室 A19AB098 内藤菜々香

01

これからの建築

—背景—

02

海の環境に対応

—目的—

これまでの建築は



人の為に
利便性を優先した建築が多かった。

これからの建築は



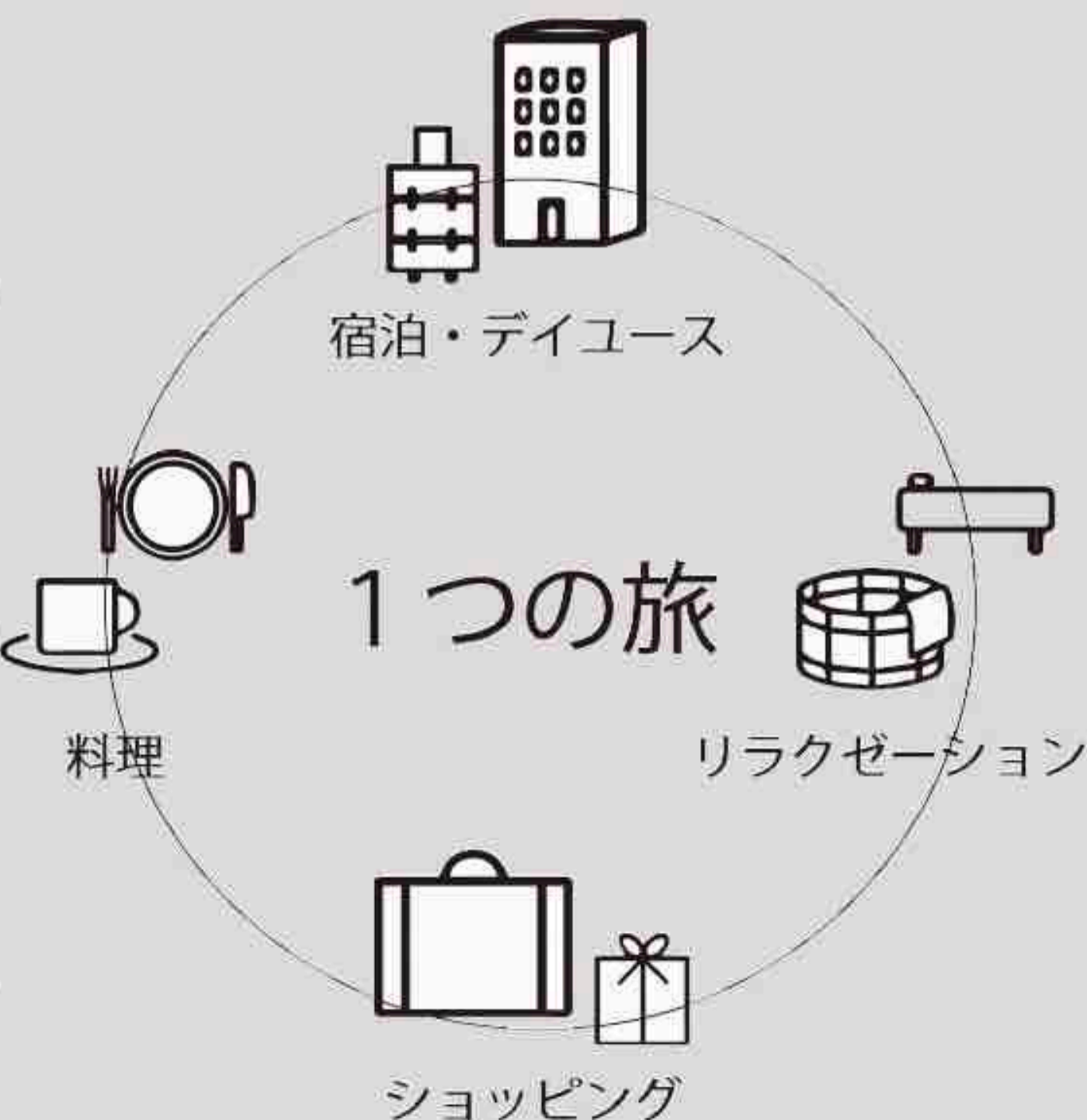
人と自然の為に
環境保護も考え構築する時代となる。

近年では、都市緑化など人と自然の為につくられた建築は提案されているが、海に着目した建築事例が少ないことから海洋問題と関連させて建築を提案する。

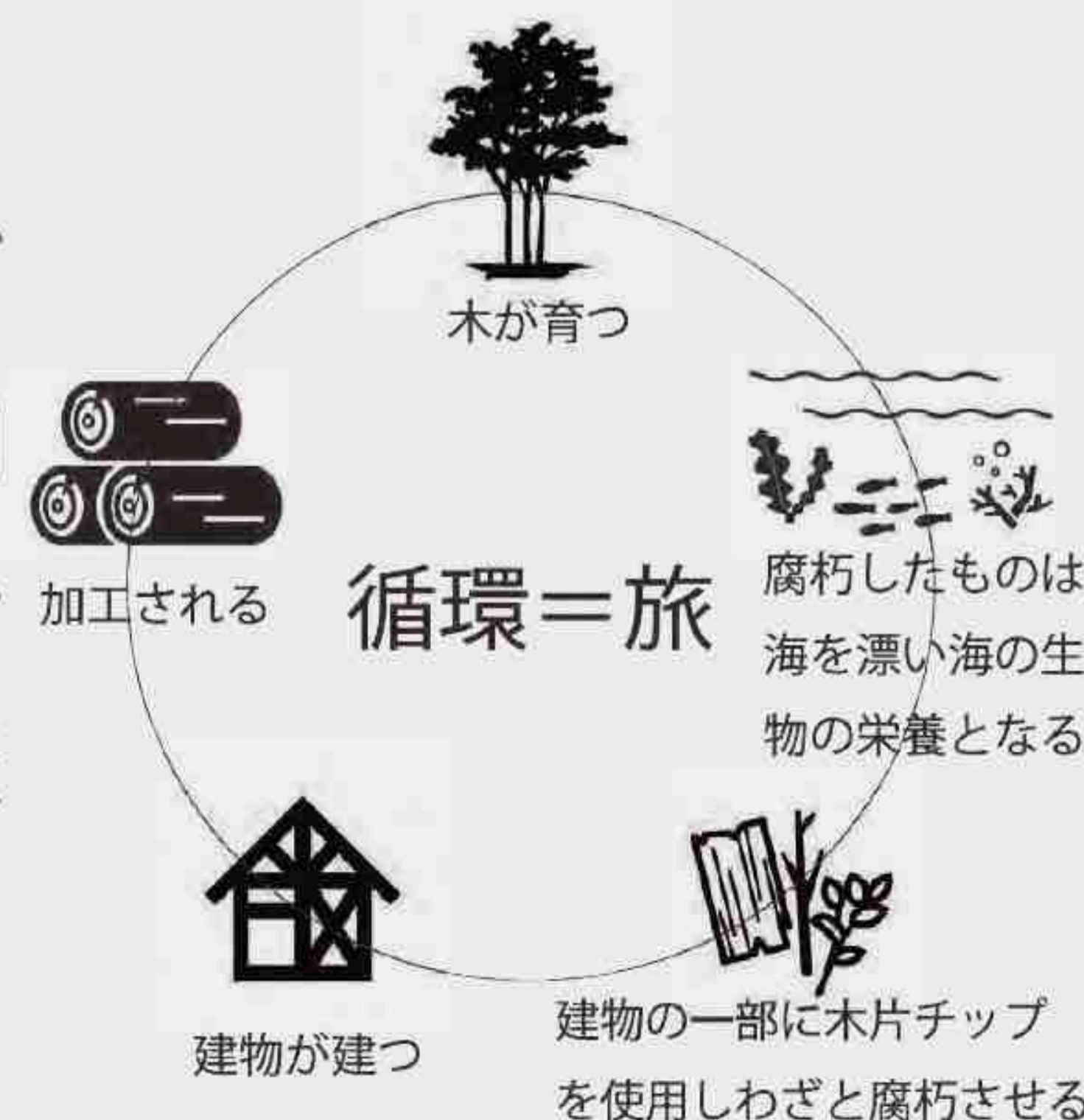
03 コンセプト

時と旅という言葉 키워드를人々と自然の為になる建築を設計する。

人
海に一番近い場所で美しい音、風、景色、匂いを感じ海の真ん中で非日常な時間を過ごす。建物内では宿泊から食事、買い物まで完結する旅ができる。



自然
フローティングの一部をわざと腐らせるように工夫。時間をかけ、自然にかえることで生物の栄養となり、この循環は自然にとっての旅である。

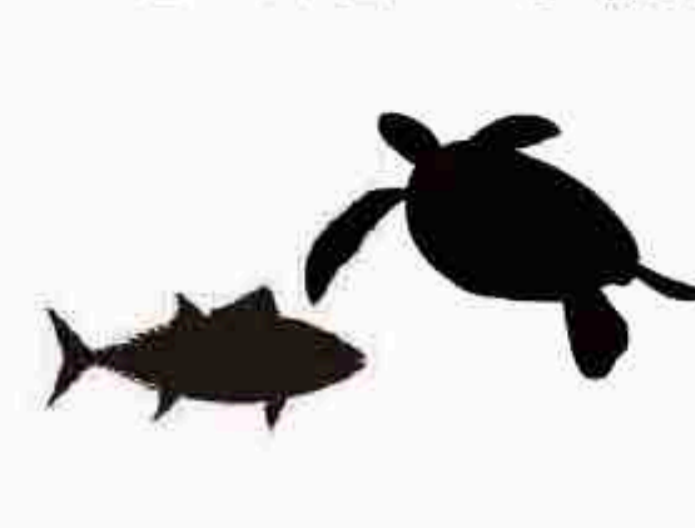


砂浜が減少する原因の一つは、気候変動による海面上昇である。

日本では海面が1m上昇すると砂浜の9割以上失われると予測されている砂浜が減少することで起こる被害



高潮・津波被害



生態系への影響



海に触れ合う機会が減る



海と共存した地域文化の衰退

2-1 砂浜減少に対応

海中には柵を取り付け、離岸堤の要素と人が自然と共存共栄できる建築要素を兼ね備えた建築物を提案。

2-2 海面上昇に対応

海に浮く木材を使用したフローティング建築とする。

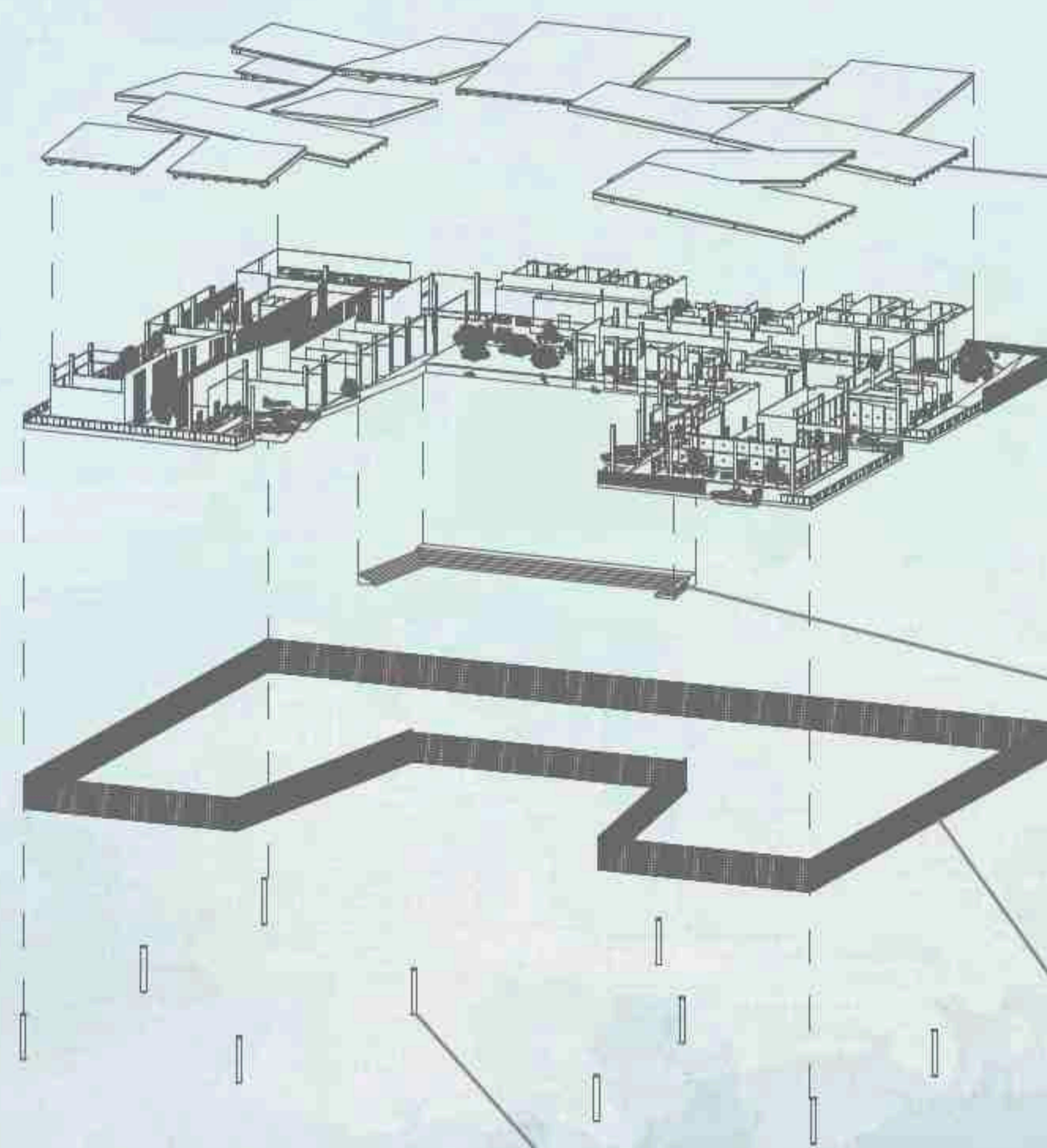
04 設計提案

外観

京都の伊根町にある舟屋をイメージ。
舟屋のように海に一番近い場所で人と人、
人と海、人と自然が繋がりを持つ建築とする。



京都 伊根町 舟屋



屋根

片流れとし、太陽の光を取り入れやすくする。また、雨水が各場所でたまる形状にし、建物内で活用する。

腐朽部分

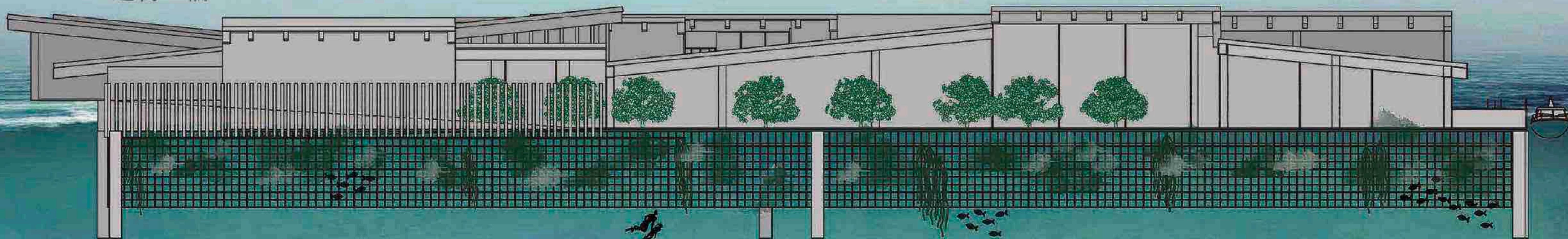
海と面する場所から腐り始め、自然にかえる。海面上昇することで下から順番に腐っていくように設計。

海中の柵

潮の流れを抑制させ、砂を溜まりやすくする。また、海藻や海洋生物海洋の住処となり、より潮の流れを抑制させる。

フローティング建築を支える柱
海底に固定する垂直パイプを設置。左右への動きを固定、上下動作のみ可能とする。

建物+柵



立面図

05 砂浜再生

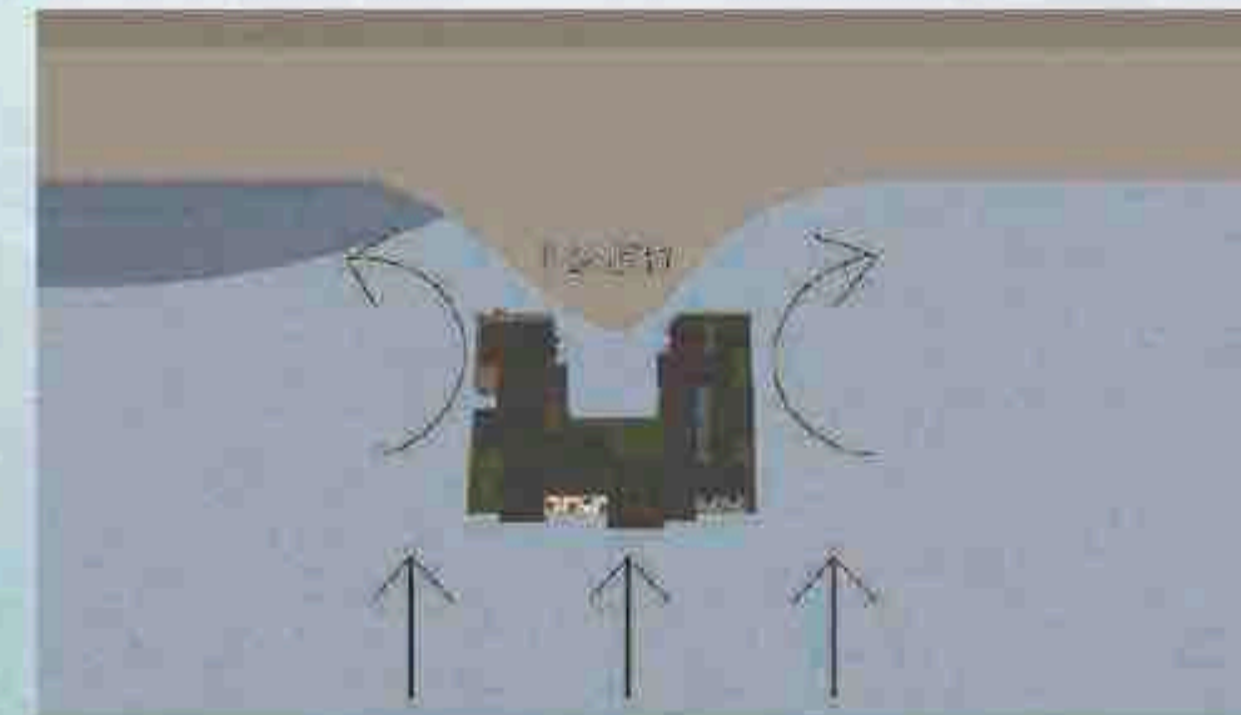
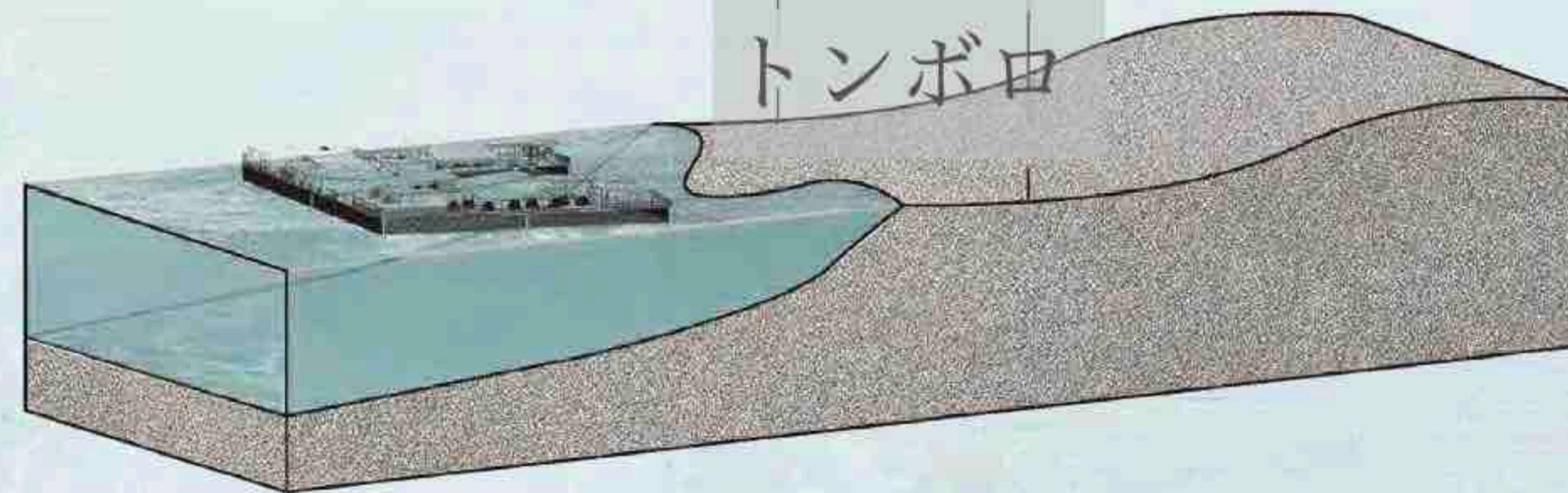
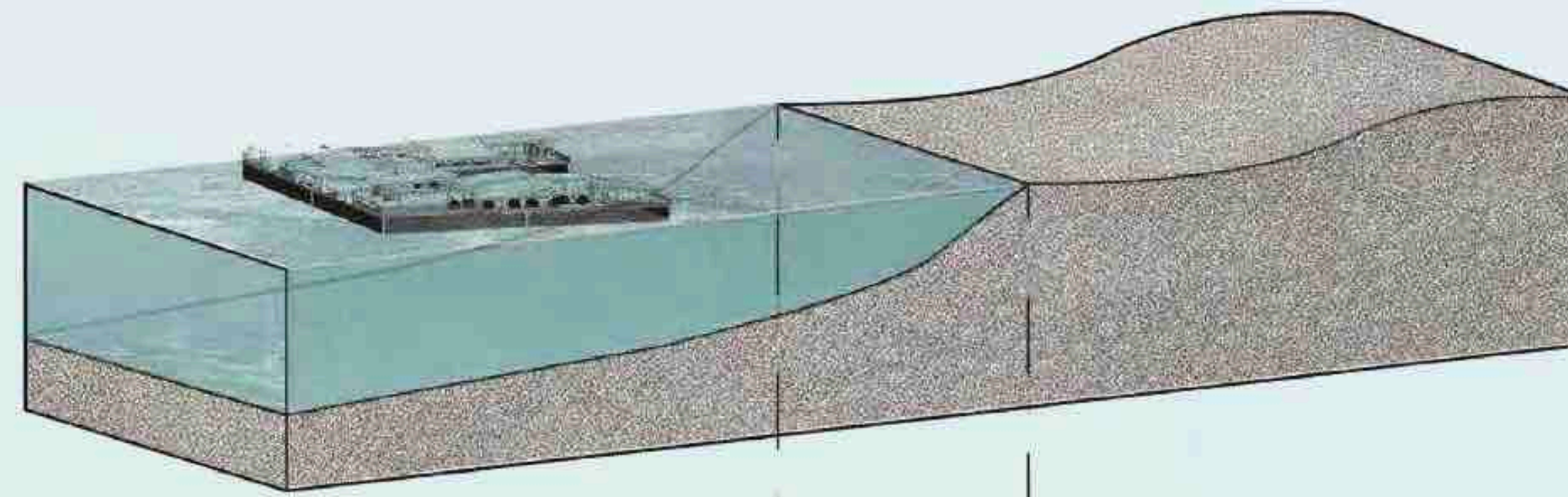
ーダイアグラムー

内観

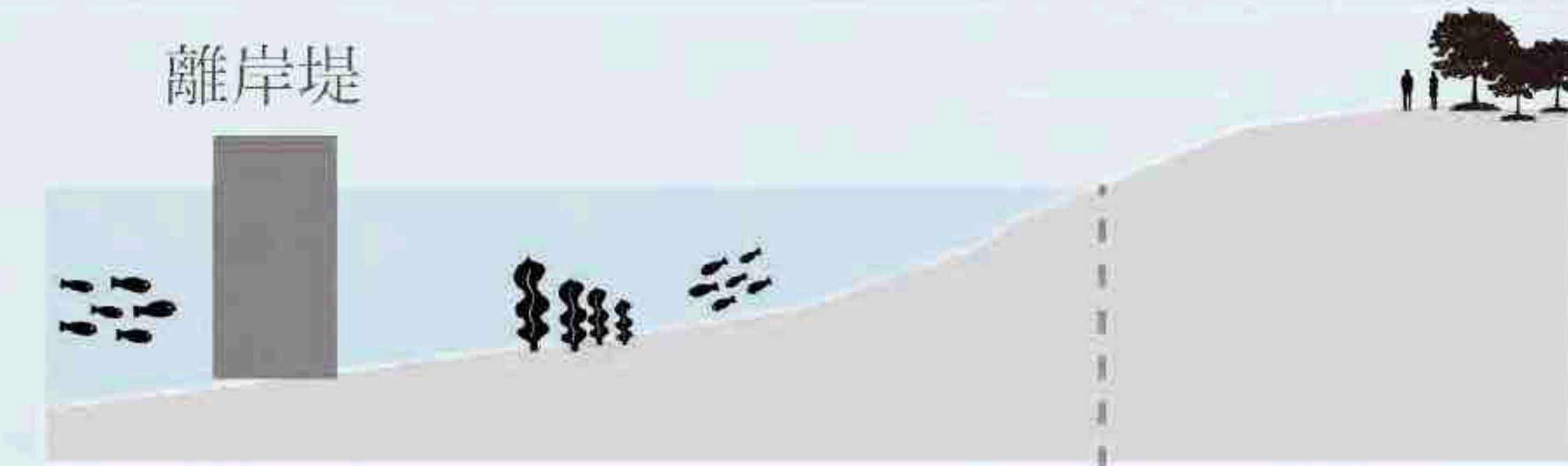
軒が連なるショッピングエリア、波の表情が各部屋で異なる宿泊エリア、露天風呂の休息エリア、食事を楽しむエリアに分かれている。



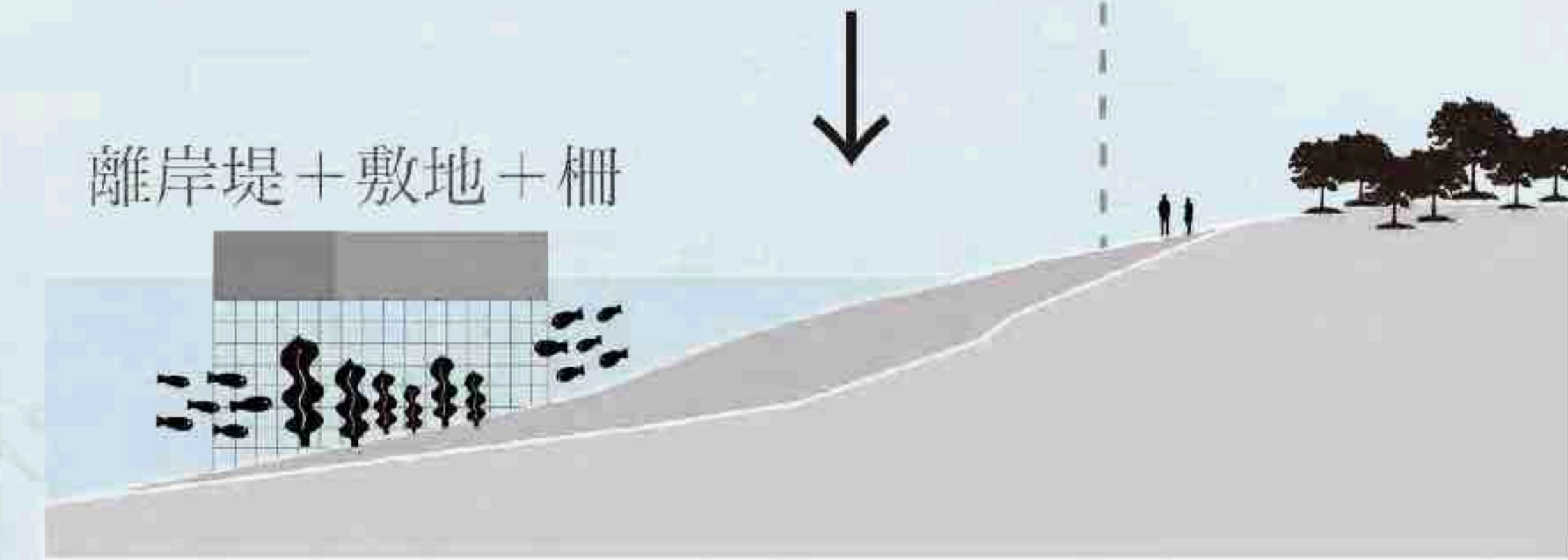
露天風呂



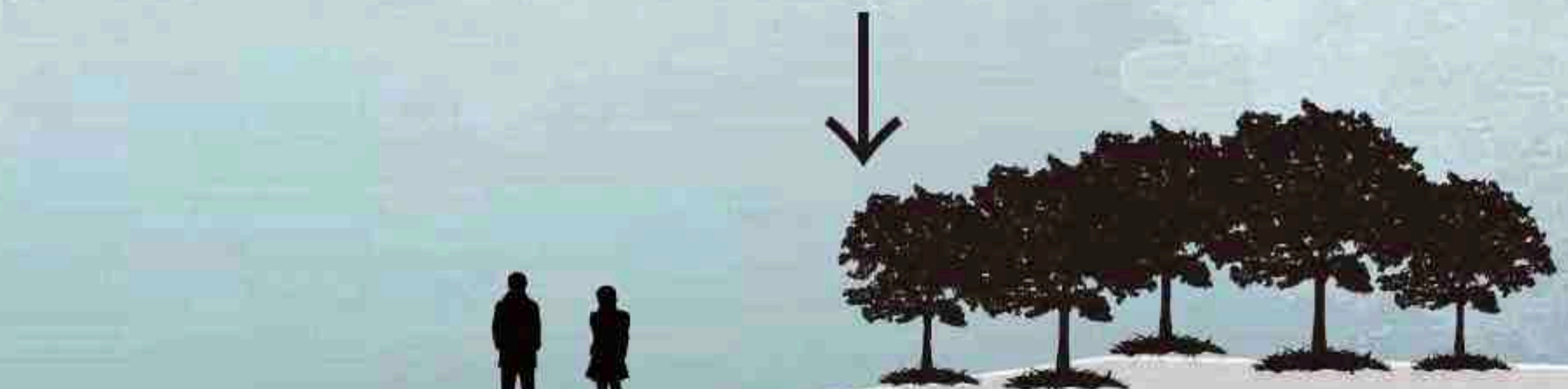
トンボロ現象とは海中にある障害物に砂が溜まり、砂州をつくる現象。波が弱まると砂が溜まりやすい海域ができ、陸と建物を繋ぐ砂州になる。



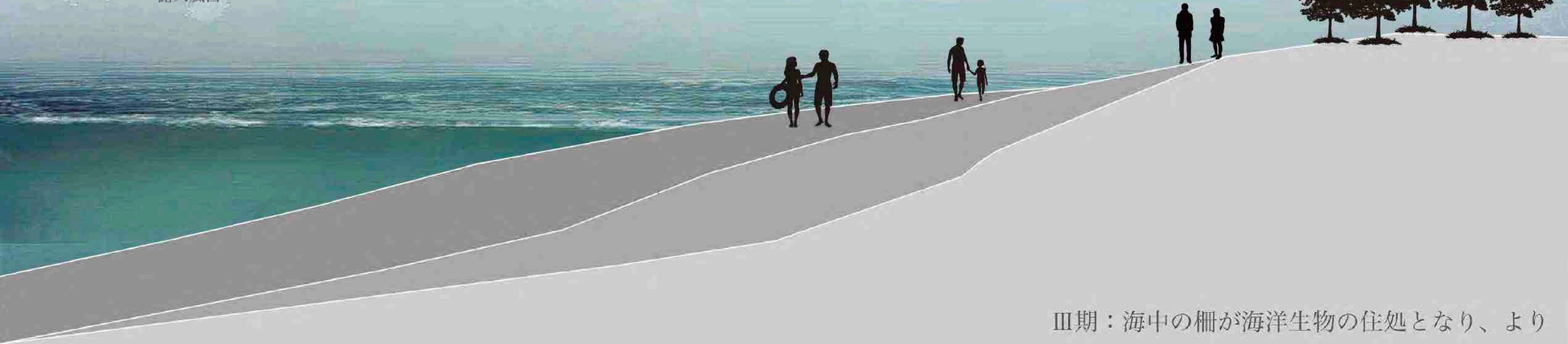
I期：気候変動による海面上昇等で砂浜が減少



II期：海中の柵により潮の流れが抑制され、削られていく砂を止める。少しずつ砂が溜まる。

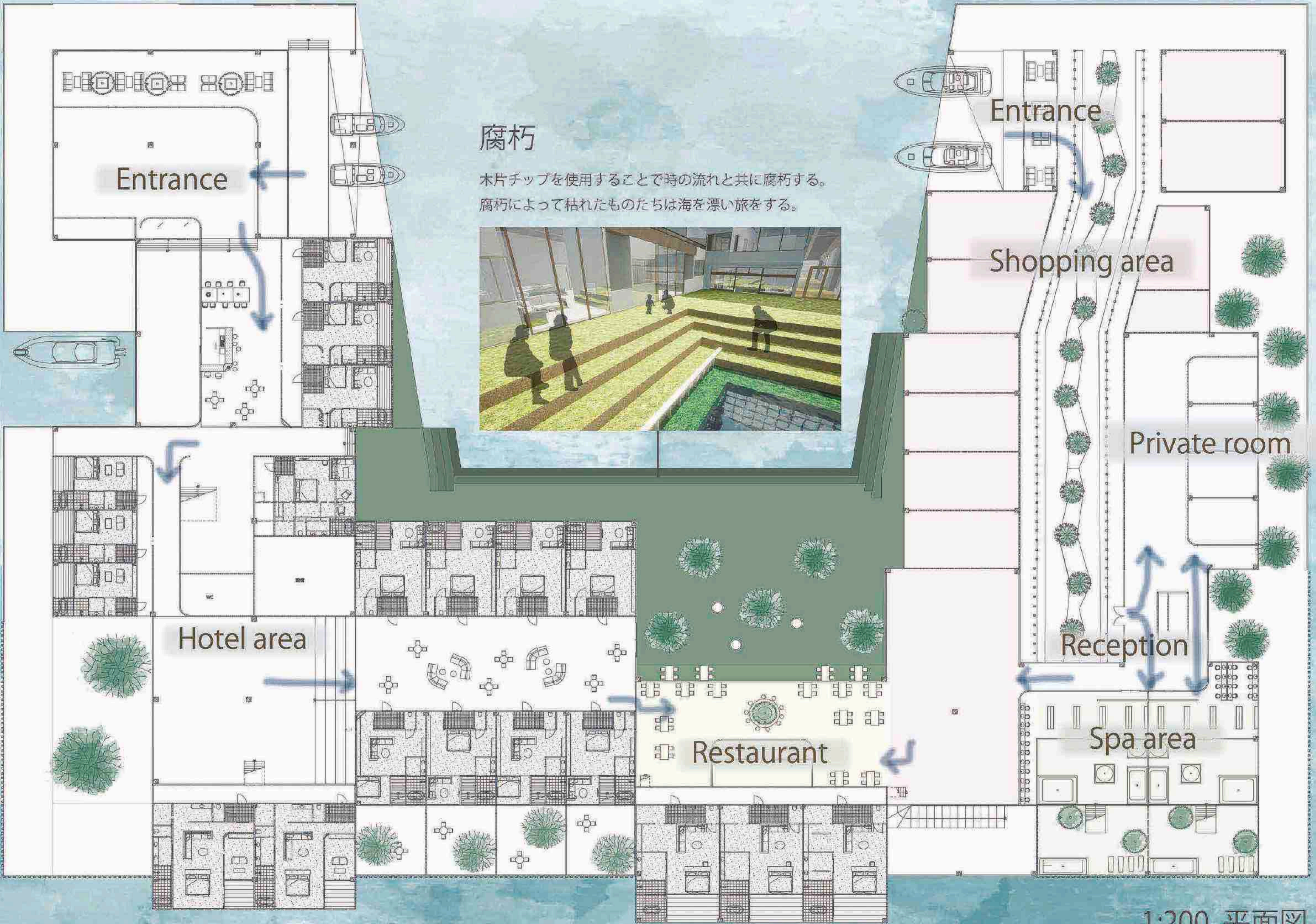


III期：海中の柵が海洋生物の住処となり、より潮の流れを抑制させる。トンボロができる。



腐朽

木片チップを使用することで時の流れと共に腐朽する。
腐朽によって枯れたものたちは海を漂い旅をする。



1:200 平面図

06 部屋平面図・パース



昼間の客室

静かな海

 海 約 60 平米	 海 約 70 平米	 海 約 70 平米	 海 約 70 平米
------------------	------------------	------------------	------------------

静かな波の音、動きを楽しむことができる部屋

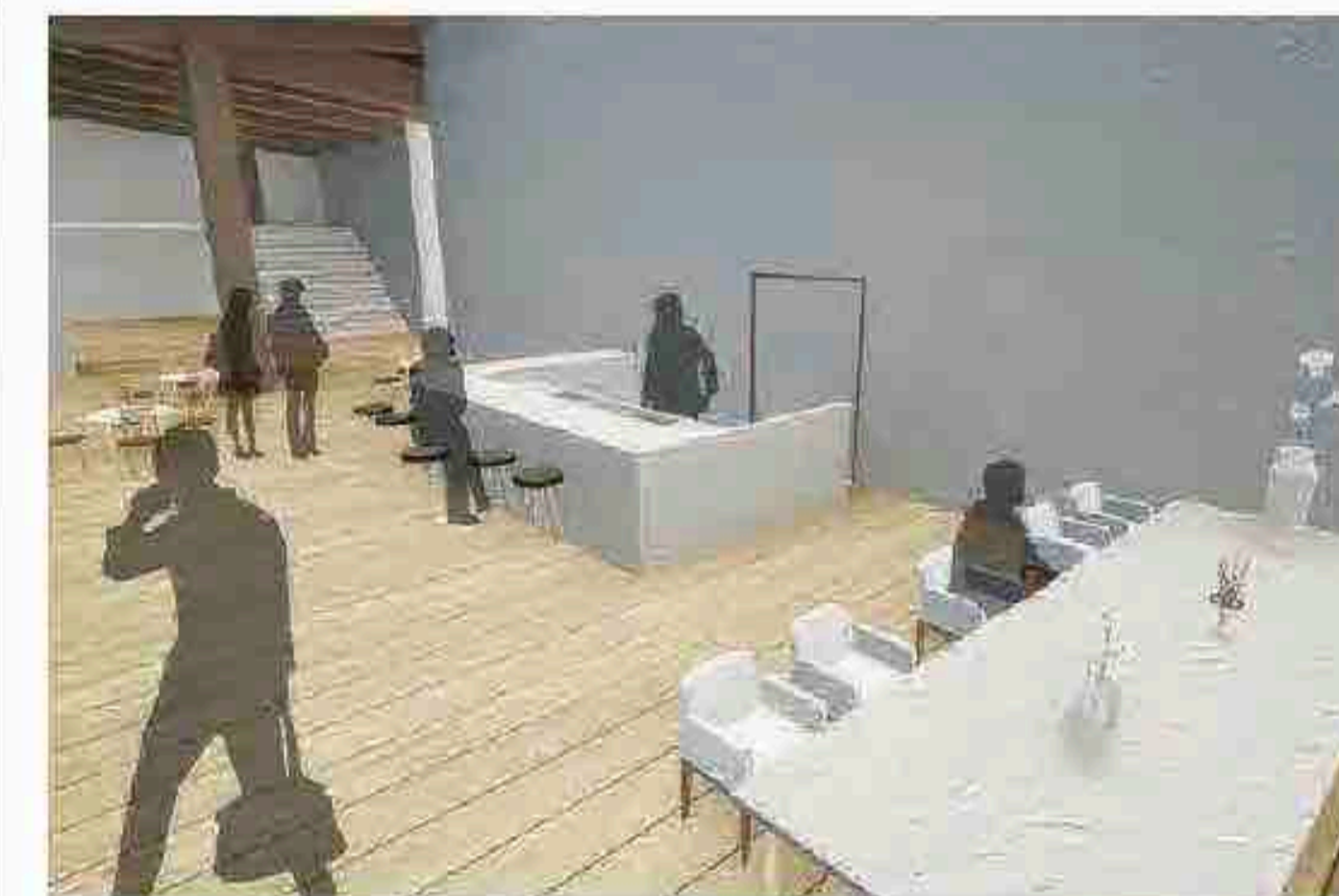


空 夜の客室



夕方の客室

<p>陸と海の間</p> 海 約 45 平米 陸と海の間で時を過ごす空間	<p>荒波</p> 海 約 80 平米 堤防の役割をする上の場所で荒波を感じながら過ごす空間 地平線を一望することができる	<p>空</p> 約 70 平米 唯一、海に面していない部屋 開放感の中で空を楽しむ空間
---	---	---



カフェ&バー



レストラン



ショッピングエリア



エントランス



海の観察エリア